



難聴

—音や言葉が聞こえにくい—

指導：東京都済生会中央病院耳鼻咽喉科 部長 岡本 康秀

企画：
日本医師会

No. 552

難聴とは

音や言葉が聞こえにくい状態を難聴といい、大きく分けて、外耳、中耳に原因のある伝音難聴と、内耳やそれより奥の神経に原因のある感音難聴の2種類があります(図、表1)。中には、音は聞こえるけれど言葉が聞き取れないという特徴を持つ後迷路性難聴という難聴もあります。

「聞き間違い」や「聞き返し」が増えてきたら、難聴を考えて、聞きとりの程度を確認しましょう。難聴になると耳鳴りを伴います。耳鳴りのほうが苦痛に感じることもあります。表2のように難聴の程度によって症状が異なり、症状に応じた対策が必要になります。

表1 難聴の種類と原因

種類	原因のある場所	具体例
伝音難聴	外耳、中耳	じこうそくせん 耳垢塞栓、中耳炎 など
感音難聴	内耳やそれより奥の神経	突発性難聴、老人性難聴、 後迷路性難聴 など

表2 難聴の程度とその症状、必要な対策

難聴の程度	聴力検査	症状	対策
健聴	25dB未満	—	—
軽度難聴	25dB以上 40dB未満	少し大きな声での会話	補聴器を検討
中等度難聴	40dB以上 70dB未満	大きな声での会話	補聴器が必要
高度難聴	70dB以上 90dB未満	耳元で大きな声で会話	身体障害者の範囲
重度難聴	90dB以上	会話が困難	人工内耳など検討

若い頃からの予防が大切

若い時に大きな音を聞いていると早く聴力が悪化します。若い頃から耳を守り、難聴を予防することが大切です。イヤホンで大音量の音楽を長時間聞かないことや、大きな音のする場所では必ず耳栓をすることを心がけましょう。

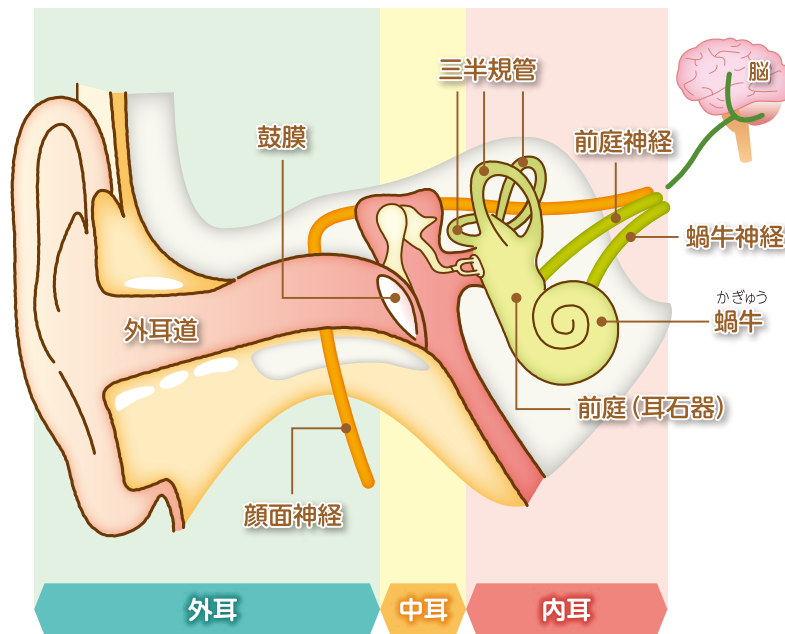


図 耳の構造

難聴の治療・対応

伝音難聴は手術で治せることが多いのですが、感音難聴は手術では治せません。しかし、突発性難聴のような突然の難聴は、早期であれば薬の内服で治療できるので、聞こえにくさを自覚したらすぐに耳鼻科を受診しましょう。一方、老人性難聴は治せませんが、補聴器による聴覚リハビリテーションで聞こえを改善できます。また耳鳴りも音響療法*で緩和できますので、専門医に相談しましょう。

難聴によってコミュニケーション不足になると、認知機能に影響を及ぼすといわれています。補聴器を使用し、地域の活動に参加するなどして、積極的に耳を使うようにしましょう。

*音のある環境を作って耳鳴りの感じ方を軽くし、耳鳴りの状態に慣れていく方法。

